

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：82805

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K24248

研究課題名（和文）従業員の主観的キャリアの構築に着目した新たな職業性ストレスモデルの定量的評価

研究課題名（英文）An examination of a new job stress model focusing on the development of workers' subjective career

研究代表者

横内 陳正（Yokouchi, Nobutada）

公益財団法人医療科学研究所・研究員育成委員会・研究員

研究者番号：70845875

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の目的は、職場のストレス要因と従業員の精神的健康の関連が、キャリアを通じて変化する自己の捉え方によってどのように異なるかを明らかにすることである。まず、文献調査と民間企業に勤務する従業員（5名）を対象としたインタビュー調査を通じて、自己の捉え方は、仕事や職場で関わる周囲の人々と自分がどのように差別化され、かつ関係しているかによって特徴づけられることが示唆された。つぎに、民間企業に勤務する従業員（1250名）を対象とした質問紙調査とデータ分析の結果、従業員のなかで自己の捉え方が確立していることが、一部のストレス要因による負の健康影響を低減させる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、従業員が職場での相互作用を通じて変化する主体であること、特にキャリアを通じて自己の捉え方が変化していくことを考慮した、新たな職業性ストレスモデルの理論的基礎を提供するものであり、将来的には、従業員のキャリア発達を踏まえた職場介入の方策につながることを期待される。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to examine the role of self-construal in the relationship between job stressors and workers' well-being. First, through literature review and qualitative interviews on five workers in a Japanese private company, self-construal in work settings was reconceptualized as the worker's sense of self with a set of two developmental orientations: distinctness and interrelatedness. Second, questionnaire survey was conducted on 1250 workers in a Japanese private company, which was followed by statistical analysis. As a tentative result, high scores in either dimensions of self-construal attenuated the adverse health effects of certain job stressors.

研究分野：公衆衛生学

キーワード：労働者 職業性ストレス 仕事の経験 メンタルヘルス キャリア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

仕事や職場に由来する様々なストレス要因は、従業員のやりがいやメンタルヘルスを促進したり阻害したりすることが知られている。しかしながら、ストレス要因とストレス反応の理論的な因果関連を示した従来の職業性ストレスモデルは、ストレス要因がもたらす正負の健康影響を統合的に説明する枠組みとしては十分でないことが課題とされてきた。

さらに、既存の職業性ストレスモデルの特徴として、従業員が職場での相互作用を通じて変化する主体であること、特にキャリアを通じた従業員の内面における発達的な変化（主観的キャリアの構築）を考慮してこなかった。より具体的に、従業員のキャリアを通じて形成・再形成されていく自己の捉え方（職場や仕事での自分をどのように認識し意味づけるか）によって、ストレス要因の健康影響がどのように異なるのかは解明されていない。

本研究課題は、従業員の主観的キャリアの構築を考慮した新たな職業性ストレスモデルの定量的な評価を通じて、学術的には、ストレス要因による正負の健康影響を統合的に説明する理論的基礎を提供すること、実践的には、従業員のキャリア発達を踏まえた新たな職場介入の方策につながることを期待される。

## 2. 研究の目的

本研究課題では、従業員のキャリアを通じて変化する自己の捉え方がどのように概念化され、また、職場のストレス要因と従業員の精神的健康の関連が自己の捉え方によってどのように異なるかを定量的に明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究課題は2部構成となっている。第1部では、文献調査とインタビュー調査を通じて、従業員によって経験される自己の捉え方を概念化し、さらにはそれに基づく概念の操作化と仮説構築を行う。第2部では、質問紙調査を実施したうえで、仮説検証を行う。

### (1) 第1部：文献調査とインタビュー調査

まず、第1部では、自己の捉え方の概念化、およびそれに基づく概念の操作化と仮説構築を目的として、文献調査とインタビュー調査を実施した。

文献調査では、自己概念とそれに関連する諸概念に着目し、それらの概念群が社会学や心理学分野の先行研究においてどのように定義されてきたか、また、職場のストレスに関する従来の研究において、それらの概念群がどのように、そしてどこまで取り扱われてきたかに焦点を当てたレビューを行った。

インタビュー調査は、公益財団法人医療科学研究所倫理審査委員会の承認を受け（承認番号：2019-1）、国内の民間企業に勤務する従業員5名を対象に行われた（2019年9月）。インタビューでは、対象者のキャリアのなかで節目となるような出来事や印象に残るような出来事を中心としたエピソードをデータとして収集した。分析には、探索と検証の中間に位置づけられるコーディング方法を用いることで、文献調査に基づく概念枠組みを仮定しつつ、実際のデータに基づいて概念枠組みを修正、精緻化、再解釈した。

### (2) 第2部：質問紙調査と仮説検証

つづいて、第2部では、質問紙調査の実施と統計解析による仮説検証を行った。第1部より抽出された概念は、個人的アイデンティティと集合的アイデンティティに関する既存の尺度を用いて操作化した。質問紙調査は、公益財団法人医療科学研究所倫理審査委員会の承認の下（承認番号：2020-1）、国内の民間企業に勤務する従業員1250名を対象に、郵送調査とオンライン調査を組み合わせて行われた（2020年10月）。調査の結果、研究参加に同意した1071名（回収率94%）からの回答が得られた。

統計解析については、自己の捉え方に関する下位尺度ごとに得点の高低で対象者を層別化したうえで、被説明変数には精神的健康度（心理的苦痛の有無、ワーク・エンゲイジメント）、説明変数には職場のストレス要因（仕事の要求度、組織的公正、役割曖昧さなど）、共変量には人口統計学的特性（性別、年齢、教育歴）、職業特性（職種、職位、勤続年数など）、健康関連行動（飲酒行動、喫煙行動、身体活動）を用いて、横断研究をデザインとしたロジスティック回帰分析などを行った（分析は現在も継続中）。

## 4. 研究成果

### (1) 第1部：文献調査とインタビュー調査

自己の捉え方を巡っては、主に社会学や心理学分野において、広義の自己概念やその下位概念についての理論的な検討がなされてきた。これらの概念群は、組織内での従業員のパフォーマンスに関連する要因としても実証的に検討され、近年では、職場のストレスに関する研究でも援用されている。しかし、職場のストレスに関する先行研究の多くは、自己の評価的側面（自尊感情、自己効力感）に着目したものであり、自己の記述的側面（自己観）については、それが従業員によるストレス要因の認知的評価を規定する可能性が指摘されているものの、これまで十分に検討されてこなかったことが示唆された。

文献調査の結果に基づき、先行研究で定義されている自己観を概念枠組みとして仮定しつつ、インタビュー調査から得られたデータのコーディングを行ったところ、対象者の自己観は、「仕事や職場のなかに自分をどのように位置づけ、意味づけるか」という形で経験されていること、また、これは対象者のキャリア構築における主要なテーマのひとつであり、配置転換や昇進などに伴って繰り返し見直されていることが示唆された。また、こうした自己の捉え方は、仕事や職場で関わる周囲の人々と自分がどのように差別化され（独自性に基づく自己）、かつどのように関係しているか（相互関係性に基づく自己）によって特徴づけられることも示唆された。

これらの結果に基づき、自己の独自性と相互関係性が確立されている程度によって、職場のストレス要因が従業員の精神的健康に与える影響が異なることを仮説として設定した。たとえば、独自性に基づく自己が確立されていることが、タスクやキャリアに関するストレス要因による負の健康影響に対して保護的効果をもつこと、相互関係性に基づく自己が確立されていることが、役割や社会関係に関するストレス要因による負の健康影響に対して保護的効果をもつことが仮説に含まれる。

### (2) 第2部：質問紙調査と仮説検証

分析は現在も継続中であるため、ここでは暫定的な結果を概説する。まず、自己の独自性と相互関係性のそれぞれについて、得点の高低で対象者を2群に層別化し、共変量で調整したうえで、説明変数に仕事の要求度、被説明変数に心理的苦痛の有無を用いたロジスティック回帰分析を行ったところ、自己の独自性と相互関係性のいずれにおいても、得点の低い群では有意な正の関連が見られたのに対して、得点の高い群では弱い正の関連しか見られなかった。この結果から、従業員のなかで自己の捉え方が確立していることが、一部のストレス要因による負の健康影響に対して保護的に働く可能性が示唆される。

### (3) 今後の展望

本研究課題の今後の展望として、第一に、今回の調査対象者を追跡することで、横断調査を縦断調査として展開していくことが挙げられる。縦断調査を通じて収集されたパネルデータを用いることで、時系列に沿った個人内の変化を踏まえた分析ができるようになり、それによって理論モデルをより精緻に評価することが可能となる。また、調査対象となる組織の数と種類を増やすことができれば、理論モデルの適用範囲に関するさらなる検討も可能になる。

第二に、本研究課題では、従業員に焦点を当て、本人の内面における発達のな変化、すなわち主観的キャリアの構築に着目した理論モデルの生成と検証を行っているが、今後は、そうした主観的キャリアの構築を許容するような職場環境の解明に焦点を当てた研究につなげていくことも可能である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>Nobutada Yokouchi, Hideki Hashimoto   | 4. 巻<br>35            |
| 2. 論文標題<br>Evolving self-concept in the workplace and associated experience of stress: A case of a large Japanese company | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>Journal of Workplace Behavioral Health  | 6. 最初と最後の頁<br>175-192 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1080/15555240.2020.1809438  | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）   | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>横内陳正, 橋本英樹                                  |
| 2. 発表標題<br>職場での公正性知覚の集団平均からの乖離と精神的健康の関連：J-HOPEを用いた横断研究 |
| 3. 学会等名<br>第93回日本産業衛生学会                                |
| 4. 発表年<br>2020年  |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|